財政危機の回避に懸けた4年間

前積丹町長 益子清美さん 急逝

前積丹町長の益子清美さん（享年66歳）が去る2月11日すい臓がんのため入院中の札幌市立病院で死去され、同月13日・14日に町総合文化センターで益子家の葬儀がしめやかに執り行われました。

葬儀には、後志管内の各市町村長や議会議長のほか、道議会議員や団体の代表、町民など合計６００人を超える方々が参列し、早すぎる別れを惜しみました。

益子さんは、昭和37年に積丹町役場に入庁されて以来、46年間町職員として奉職され、その間、国保診療所事務局長、建設課長、歳入課長、総務課長など幹部職員として、また、平成12年から1期3年7カ月、亡き白鳥町長の下で助役としてご活躍され、平成16年6月からは1期4年間、第7代目の積丹町長として、町の財政破綻迫る困難な多くの課題を背負い町政を担われました。

町長就任直後の平成16年9月の台風災害の発生、平成18年1月の豪雪災害での自衛隊派遣など、非情とも言える自然災害の追い打ちや、地方自治体の財政健全化法適用回避のための時間との戦いなど、困難極める新たな課題と遭遇しながら、日夜を問わない激務の4年間でした。

益子さんの激走の4年間の多大のご労苦に感謝しながら、そのご功績を称え安らかなご冥福をお祈りします。

――松井町長弔辞（抜粋）――

あなたのあまりにも突然の訃報は積丹町の隅々まで、深い悲しみの中に、まるで悪夢を見ている思いであります。あなたが町長室を後にしてからまだ2年8カ月。

厳しい病床での戦いの日々にあって、ただひたすら「一日も早い郷土の財政再建を案じながらも、二千六百人の町民と後輩町職員に辛く長い苦難の道を歩ませたことへの自らの呵責の念にじっと耐えられていた」ご様子を奥様にお聞きし、あなたの郷土愛の信念と公務員としての責任感の強さを改めて声高く称賛せずにはおられません。

積丹町誕生50年にして遭遇した町の財政破綻という未曽有の困難の克服を担う司令塔として、苦悩の連続の中で、苦渋の決断を迫られる連日、まさに日夜を問わない激務の一語に尽きる4年間でありました。

あなたが信じた「開かれた町政と住民対話のまちづくり」の大切さの訴えは、未曽有の町の困難を乗り越える町民共有の理念となり、礎として今ようやくその実を結ぼうとしております。

そして、地方分権・地域主権の確かな到来の時代を生きる、我が積丹町の道しるべを、あなたは、築かれました。

そのご功績は、誠に大きく、かけがえのないものであります。

ただ、町長という職責ゆえに、日夜そして休日の区別なく、人知れず過酷な心労の多かったこと、そして又、社会や政治の世界の無情に涙したことなど、どんなにか多かったことでありましょう。

私たちは、あなたのまちづくりの理念を受け継ぎ、急がれる町の再建と、厳しさを増す地方自治体の困難な時代を乗り越えるため、互いに手を携え、その職責をとおして、町政の新たな進展と郷土の建設に全力を尽くしてまいりたいと存じます。

惜別の情、語り尽きない今、限りない郷土積丹町の平和と発展に、そして奥様と二人のお子様をはじめ、ご兄弟の皆様の前途に絶えることのない、あなたの永遠のご加護を賜りますように、心から念じまして、お別れのことばと致します。